

体系 近代会計学Ⅻ

社会会計

合崎堅二責任編集

中央経済社

昭和五十五年十二月二十日 第一版発行

社会会計

総編集 黒澤 清

責任編集 合崎 堅二

発行者 渡辺 正一

発行所 株式会社 中央経済社

東京都千代田区神田保町一の三二の二

電話 (二九三) 三三七一 (編集部)

振替口座・東京〇一八四三二

印刷・厚徳 製本・誠社

落丁・乱丁本はお取替え致します

3334-101573-4621

総編集のことば

本年は、戦後わが国の会計学界に一大転機をもたらした「企業会計原則」公表三十周年に当たるが、それは奇しくも、中央経済社創立三十周年の時期に合致する。ここに公刊する「体系近代会計学」全十四巻は、中央経済社の創立三十周年を記念する出版企画であるとともに、この三十年の歳月の流れの間における、わが国会計学のすべての分野にわたる系統的発展を刻み、かつ、将来の進歩のための道しるべをうち建てようとする試みでもある。

このような会計学のランドマークを建立しようという試みは、これまですでに十年毎に行われてきた。第一回目は、社業創立十周年を記念した「体系近代会計学」全九巻であり、第二回目は、社業創立二十周年を記念した「近代会計学大系」全十巻である。

第三回目が、今回の「体系近代会計学」全十四巻である。こうして十年毎に建ててきたランドマークは、わが国会計学の前進への指南車の役割を担うものといっても過言ではあるまいと思う。今やまさにランドマークというよりは、新しいビーコンと言うべきではあるまいか。

最近における会計学の発展は、その幅においても、その深みにおいても、大いに目をみはるに足るものがあ

る。その幅は、法会計学と経済会計学という二つの境界領域にまたがり、その境界のなかの広い場において、会計学の固有の領域はますます深みを加えつつある。その学問的基礎をなすものは、「会计学基礎理論」と「会計測定理論」である。近年における測定理論の発達は、現代会計学に科学的基礎を与えたものといえることができる。

このような土台の上に、「財務会計論」、「業績評価会計論」、「資金会計論」、「監査論」等すなわち「測定および伝達の体系」としての固有の会計学の領域が開発されてきたのである。しかもこの測定および伝達の体系としての会計学の範囲は、さらにこの十年来、「会計史及び会计学史」、「物価変動会計」等新しい研究開発によって拡大され、その深みを増すとともに、多彩な展望を与えるにいたった。とくに、近年注目すべきものは、国際会計基準の発展である。会計諸基準の国際的改善統一運動は、創始されてから、まだ日は浅いけれども、日本をふくむ創立委員国九カ国に加えて、数十数カ国がすでに準会員国として参加するにいたり、将来の力強い発展が期待されている。

前述の二つの境界領域、法会計学と経済会計学を代表する研究業績についてもふれておかなければならない。前者については、「企業会計法」、「税務会計論」等があり、後者については、「社会会計（企業社会会計をふくむ）」、「理論会计学」等がある。

本全集の編集に当たっては、上述のごとき現代の会計学の全領域について、私どもは、体系的知覚をもって、最善の研究業績を集大成するために、あらゆる努力を傾けた。全十四巻の各巻には、私からそれぞれ各編集責任者を委嘱し、その熱心な協力と、総編集者としての私との間の頻繁な意思疎通を通じて、新しい構想のもとに次のごとき体系的な分類・配列を行ったのである。

- 第一卷 会計学基礎理論
- 第二卷 財務会計論
- 第三卷 会計測定の理論
- 第四卷 業績評価会計
- 第五卷 原価会計論
- 第六卷 会計史および会計学史
- 第七卷 資金会計論
- 第八卷 インフレーション会計
- 第九卷 財務諸表の監査
- 第十卷 国際会計基準
- 第十一卷 企業会計法
- 第十二卷 社会会計
- 第十三卷 税務会計論
- 第十四卷 理論会計学

二十世紀に入ってから、ようやく新しい社会科学の一員として登場した若い学問、近代会計学は、いわゆるパラダイム変革の時期に際会しているのではあるまいかと私は思う。パラダイムというごとき科学思想史上の基本概念は、会計専門家にとっては、まだなじみのうすいことばであるかも知れないが、私のいうところの新しいピコンの役割を担うべき本全集の性格を説明するために、敢えて引用しておきたいのである。

科学上のパラダイムは、すくなくとも四つの要素から成る。第一の要素は、記号一般化 (symbolic generalization) である。自然科学や数学における記号一般化は、世界的に共通であり、確固不動の記号および符号の体系が存在していることは周知のところである。社会科学の領域では、共通の記号体系の確立は不十分であることをまぬがれない。しかし会計学には、ある程度記号一般化が行われている。たとえば最も単純なものだけあげておくならば、勘定的思考様式と勘定記号、バランス・シートの思考様式と貸借対照表的記号、コスト的思考様式とコスト記号等はそれである。

第二の要素は、仮説 (hypothesis) やモデル形成に対する専門家集団の間における共通の信念である。成熟した学問における偉大な仮説や、卓越したモデル形成の例を、私どもはすでに知っている。幸いにして、会計学の領域でも、「企業会計原則」の設定や、「国際会計基準」の発表の試みによって、かかる共通の信念が生まれつつあるのを見ることができよう。

第三の要素は、共通の価値観ないし目的観である。価値観の多様化が問題となっている現代社会において、共通の価値観を確立することは至難の業であるかも知れない。価値観の変化は、パラダイム変革に導く出発点となるからでもある。しかし会計学の領域では、共通の価値観がめばえつつある。すなわち会計情報の測定および伝達における適正性の探求の理念、ならびに真実性の追求の理念はまさにこれである。

第四の要素は、研究業績の範例である。パラダイムという言葉は、この範例という觀念から導き出されたものであるが、成熟した学問における定理、法則、学説等の体系はそれを代表する。社会科学の領域においても、その例を見い出すことはかならずしも困難ではない。本全集におさめられた全研究業績は、現代の会計学の成果を代表する範例の名に値するものにしたということだが、私どもの念願である。

さて、本全集の執筆者総数百二十一名、最も斬新な最高の業績を集成し、ここにいわゆる会計学の新しいパラダイムの範例をつくりあげようと私どもは、努力をつくしてきた。終りに、各巻の責任編集者のご協力に感謝の意を表するとともに、総編集代表として、ご挨拶申し上げるしだいである。

昭和五十四年九月

黒 澤 清

序 文

社会会計研究にも、ささやかな歴史が作られている。前回の「近代会計学大系」（昭和四十三年から発刊）では、わずかに能勢教授（第五巻・財務会計論・第十一章「国民所得会計」）と筆者（第一巻・会計学の基礎概念・第九章「経済会計の展開」）が参加させていただいた「社会会計」というテーマが、今回の「体系近代会計学」では、独立の一卷として編集されることになった。感なきをえないのである。

われわれ社会会計グループ（能勢・玉田・原田・矢部・河野の諸教授と筆者）が、日本会計研究学会のスタディー・グループを組織し、その成果として『企業会計と社会会計』（森山書店）を刊行したのは、昭和四十三年春のことであった。爾来、ほぼ十年の歳月が流れている。

『企業会計と社会会計』では、会計学研究の一環として社会会計を取りあげること自体の意義を明らかにすることと焦点を合わせ、主として英米の先駆的研究成果の集大成につとめ、「会計一般理論への志向」と「会計カリキュラムへの社会会計の導入」という二点に帰結する方向を提示するにとどまった。

今回は、新たに中村・徳谷両教授の参加を得て、社会会計のその後の発展をマクロ・レベルとミクロ・レベルの両局面でとらえることに重点をおくことにした。マクロ会計については、「社会会計の展開」として新SNAによる社会会計システム、経済開発と社会会計の役割、フランスにおける会計標準化、地域社会会計等五つの問

題にしぼって、その現状と展望を明らかにした。一方、ミクロ会計については、「企業社会会計の動向」として、まず社会的費用と社会会計のつながりの究明をとおしてマクロ会計のミクロ会計への投影の必然性をとらえ、社会責任会計、社会監査、企業社会原価計算等、企業社会会計と総称される新しい会計領域の動向を追求した。いずれの論題からも「ミクロ会計とマクロ会計の連環の形成」というテーマが浮彫りされているところに、今回の共同研究の結論があるようにおもう。切に読者のご判読を願うものである。

夢のない学問は意味がないといわれる。会計学に託する夢は何か、それはひとさまざまといわざるをえないが、会計学の立場から社会会計に取りくむという研究は、とりわけ学問的想像力の尊重を前提にしなければ成りたため、またそれゆえに夢多き研究分野といえるのではないだろうか。

社会会計研究の夢は、会計をほんとうの意味で「社会力としての会計」に成長させ、「会計と社会」というテーマに真正面から取りくむ社会的存在たらしめようとするところにある。したがって、この視点に立つかぎりわれわれは、常識的に考えられている商法、税法など法とのつながりでいわれる「制度」を超えた深い次元で、社会の問題にその思索を加えなければならない。それは、終局的には、「企業会計即会計」という会計観を超克する問題なのである。会計の新しいフィロソフィーと会計観の確立こそは、社会会計研究に課せられた最も基本的なテーマである。

黒澤清先生が「計算経済学」を提唱されてから四十年、計算経済学の大きな夢を客観化する歩みは、まことにゆるやかではあるが社会会計グループにも継承されており、次の世代の出現をも期待できるようになった。いっそうの精進を期するものである。

社会会計研究の先駆者のひとり、F・シーウェル・ブレイ教授が、昨年一月、ロンドンで逝去された。一九五

七年秋から約九カ月、しばしばイリー・ブレイスの事務所にブレイ教授を訪問し、経済会計の現状と将来についていろいろお話し合いをしたとき、「私の考え方はスローリーに理解されつつある」という言葉をしみじみ繰りかえしておられた教授の面影を忘れることはできない。純乎たるものは永遠である。二十年にわたる教授の学問的沈潜の重味を実感するわがグループの総意により、このささやかな研究成果をブレイ教授のご霊前に捧げ、謹んでご冥福を祈る次第である。

昭和五十五年十一月

合 崎 堅 二

序 章 企業会計と社会会計	横浜国立大学教授	合 崎 堅 二
社会会計の展開		
第一章 社会会計の体系	神戸大学教授	能 勢 信 子
第二章 フランスにおける会計標準化と社会会計	甲南大学教授	中 村 宣 一 朗
第三章 経済開発と社会会計	中央大学教授	玉 田 啓 八
第四章 地域社会会計	獨協大学教授	河 野 正 男
企業社会会計の動向		
第五章 社会的費用と社会会計	中央大学教授	原 田 富 士 雄
第六章 社会責任会計と社会監査	中央大学教授	矢 部 浩 祥
第七章 企業社会原価計算	成蹊大学教授	徳 谷 昌 勇

目 次

序 章 企業会計と社会会計

一 社会会計研究の軌跡

1 社会科学としての会計学の確立

2 企業会計と社会会計の統合

二 社会報告の会計的展開

1 社会報告の主題

2 社会報告とマクロ会計

3 社会報告のミクロ会計的展開

三 社会会計研究の諸問題

1 新SNAの展開

2 企業社会会計の動向

四 社会会計研究の課題

社会会計研究の課題

社会会計の展開

第一章 社会会計の体系

一 開 題	三
二 社会会計の対象	五
三 社会会計の計算構造	七
四 社会会計の勘定構造と計算原則	一〇
五 一般会計のサブシステムとしての社会会計	一五
六 要約と結論	二六

第二章 フランスにおける会計標準化と社会会計

一 会計標準化の意義	三〇
二 会計標準化の成立過程	三六
三 会計標準化と社会会計との関係	三七
四 企業会計と社会会計との連繫にかんする諸見解	三八
五 社会会計企業部門の勘定体系と媒介システム	三八
六 一般的会計指針改正の方向	三九
七 結 び	四〇

第三章 経済開発と社会会計.....101

一 はしがき.....101

1 序.....101

2 社会会計の職能と領域.....101

3 正確な情報の利用と会計職能の拡大.....103

二 経済開発の意義、主要な目標および諸要素.....104

1 経済開発の意義と推進動機.....104

2 経済開発の主要な目標.....104

3 経済開発のための主要な諸要素.....110

三 経済開発プランニングにおける社会会計の役割.....117

1 序.....117

2 経済開発プランニングの意義とそのプロセス.....118

3 経済開発プランニングにおける社会会計の役割.....121

4 各種の会計システムの標準化と統一.....127

四 むすび.....130

1 カレント価値による測定の必要性.....130

2 プランニングの社会的側面の重視.....133

第四章 地域社会会計……………三三

一 地域社会会計の展開……………二五

1 地域社会会計の現状……………二五

2 地域社会会計の発展を促す新要因……………二七

二 会計エンティティとしての地域社会……………四四

1 会計エンティティの概念……………四四

2 地域社会の範囲……………四五

3 国内概念と国民概念……………四六

三 地域社会勘定……………四九

1 地域社会勘定のモデルとしての国民勘定……………五〇

2 地域社会勘定……………五四

四 地域社会会計の新分野……………五三

1 公害問題……………七四

2 地域主義……………七九

企業社会会計の動向

第五章 社会的費用と社会会計……………八五

一 二つの社会会計……………八五

二	ミクロ社会会計の土壌……………	一六
1	公害問題と社会的責任論……………	一六
2	広がる社会的責任の範囲……………	一七
三	マクロ社会会計の動向……………	一六
1	その成立と展開……………	一六
2	統合から拡張へ……………	一七
四	社会的費用の諸問題……………	一六
1	公害と社会的費用……………	一六
2	社会的費用の解釈をめぐって……………	一八
3	マクロ社会会計と社会的費用……………	二二
五	むすび……………	二三
第六章	社会責任会計と社会監査……………	三七
一	社会監査の誕生……………	三七
1	社会監査と株式会社……………	三七
2	経営業績監査と経済業績会計……………	三九
二	社会・経済会計の提唱……………	三三
1	会計の社会諸科学への適用……………	三三
2	会計的測定が必要とされる経済領域……………	三四